

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02080

研究課題名(和文)近代ドイツのナショナリズムとさまざまな女性運動ー日本のフェミニズムも含めて

研究課題名(英文)Nationalism in Modern Germany and Diverse Women's Movement including Japanese Cases

研究代表者

姫岡 とし子(Himeoka, Toshiko)

奈良女子大学・アジア・ジェンダー文化学研究センター・協力研究員

研究者番号：80206581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：参加をうながすナショナリズムは、女性をネイションのための活動へと招き入れ、家庭の外へと連れだし、女性独自の社会活動を活発化させた。活動の基盤となったのは、女性が日頃家庭で行っているケアの活動である。ナポレオン戦争期には女性協会が形成され、戦争支援や看護活動、出征家族の支援を行った。この活動は戦時の女性の支援活動の手本となり、のちのドイツ統一戦争期に引き継がれた。この時期から、女性協会の活動が恒常的な愛国・福祉活動へと発展していき、看護と福祉というケアをベースにネイションでの居場所を獲得した。植民地獲得にさいしては、血と文化という観点から人種主義的ナショナリズムの強化に貢献した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

女性運動のなかで、フェミニズムに関する研究は多いが、ナショナルな女性運動に関する研究はほとんどない。本研究では、ナポレオン戦争期、ドイツ統一戦争期から第二帝政期、植民地獲得期の3つの時期に分けて、1、ナショナルな女性運動が、女性にどのような活動機会を提供して、どう組織化したのか、2、その運動の目的や内実はいかなるもので、ナショナリズムが基盤とする男性＝戦闘、女性＝家庭という領域分離とどう関連しているのか、3、ネイションのなかでどのような居場所を獲得したのか、について考察した。そして、ナショナルな女性運動が女性の政治化を促すとともに、ネイションのジェンダー化を推進したことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Nationalism urging participation invited women into activities for nation, took them out into outside of the family and activated women specific social action. Women's activities based on their usual care work in families. During the Napoleonic war women build their own associations in order to support war, nursing activities and family member of front soldiers. Women's activities in the following German unification war took this case as a model. From this time period women's association executed their national and welfare service permanently. Based on the care activities concerning welfare and nursing women gained their space in the nation. In the colonial period women contributed to the racial nationalism from the standpoint of blood and culture.

研究分野：ジェンダー

キーワード：ドイツ ナショナリズム ネイション 女性運動 戦時福祉 フェミニズム 植民地 人種主義

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1990年以降、ソ連邦の崩壊を背景とするナショナリズムの高揚や、B・アンダーソンの『想像の共同体』以降、活発になった構築主義や文化史的、ポストコロニアルな観点からのネイション・ナショナリズム研究は、ジェンダー史にも波及し、現在は、女性はネイションから排除されるのではなくネイションにとって不可欠の構成員として包摂され、男女別々の居場所と役割を与えられるという見方が浸透している。さらにグローバル・ヒストリーやトランスナショナル・ヒストリーが盛んになり、一国史の枠組みをこえ、植民地研究など、他者の構築や他者との関わり方を問う研究が展開されるようになった。ジェンダー史研究では、そのプロセスにおける女性の役割や関与の仕方を問うている。ナショナリズムとジェンダー史研究では、ナショナリストによるジェンダー構築、ナショナルな女性運動などが考察対象となり、ナショナリズムにおける排除と包摂の過程でのジェンダーの作用の仕方や、その民族・人種や階級との絡み合い方などが問われている。

日本の西洋ジェンダー史の分野では、ナショナリズムの文脈でのジェンダー・民族・階級の関連を正面から問うたものは存在しない。アメリカやドイツでは、ドイツのナショナルな女性協会についての研究は存在するが、いずれの研究も短期的なタイムスパンでの研究である。長期的なスパンで社会の変化や女性の社会進出、それに対する男性たちの抵抗と関連させながら、ナショナルな女性協会の変化を考察したものは存在しない。

2. 研究の目的

ドイツでは、ナポレオン戦争期にはじめて祖国を脅かす他者としての敵の存在が意識され、国民(ネイション)意識の覚醒が訴えられた。そして男性と女性がそれぞれネイションのための活動をはじめ、戦争支援のためのナショナルな女性協会が形成された。この協会はナポレオン戦争後に解散されたが、1860年代のドイツ統一戦争期にふたたび戦争支援のための女性協会が形成され、戦後にそこからナショナルな恒常的女性協会が誕生した。ナポレオン戦争期から第一次世界大戦開戦までの110年あまりの期間にドイツ社会は、工業化の進展、国民国家形成、覇権的ナショナリズムの形成と植民地獲得など、大きく変容し、階級闘争の激化、フェミニズム運動の誕生、人種・民族的排他主義の強化を経験していた。19世紀末には目的別にさまざまなナショナルな女性協会が存在したが、女性の協力によって強力なネイション形成をめざす、という点では一致していた。その意味で、こうした女性協会の活動をナショナルな女性運動と捉えることができる。

ナショナルな女性運動はどのような活動をし、どう強力なネイション形成に尽力し、そのために何に注目し、ネイションをどのような方向に導こうとしたのか。そのさいには、既存のジェンダー規範との対処、家庭外での活動の捉え方、組織として自立や男性たちとの関係、フェミニズム運動への立場、階級や民族・人種との関連、などさまざまな問題が関与してくる。こうした問題を見極めながら、社会変動のなかでのナショナルな女性運動の行方を追究する。

3. 研究の方法

一九世紀初頭から第一次世界大戦までの一〇〇年以上にわたる女性のナショナルな活動を、三つの時期にわけて考察する。まずは二次文献を読んで研究動向を把握するとともに、時代による社会変化に応じてナショナルな女性協会に求められているものを探求した。

最初の時期は、祖国の危機と愛国心の覚醒が訴えられたナポレオン戦争期で、女性たちは祖国のために具体的にどのような活動をしたのかとその成果を、当時のジェンダー規範やあらたなジ

エンダー構築、とりわけドイツの男女に特徴的とされたジェンダー像の構築と関連させながら考察する。また、当時の女性の活動がのちの時代にどのような影響を及ぼしたのかにも注目する。二つ目は、ドイツ統一戦争から世紀末にかけての時期である。この時期に登場した恒常的なナショナルな女性協会は、どのような立場と目的で組織化を図り、社会変動とどう向き合い、フェミニズム運動や階級闘争の激化にどう対処したのかを考察する。その上で、ネイションのジェンダー化の行方について探っていく。

三番目は、ドイツが植民地を獲得し、覇権競争を展開した19世紀末から第一次世界大戦までの時期である。植民地政策と人種主義的な排他主義という、ドイツナショナリズムのあらたな展開のなかで、女性協会はどのような課題を設定して、何を切り拓いていったのか。ナショナルな男性協会は女性の自立的な活動を嫌い、補助的な立場にとどめたが、女性はこうした男性とどう向き合ったのか。また自らの活動と女性の地位向上の問題をどう考えていたのか。

以上のような問いに、二次文献、協会の機関誌や同時代文献、さらに部分的には文書館史料も用いながら回答し、ナショナルな女性運動が女性の社会活動や女性の政治化に果たした意味合いについて考える。

4. 研究成果

ナショナリズムの勃興によって、男性は公領域、女性は私領域という近代社会の役割分担に、男性は戦闘が加わった。女性は家庭にも、ネイションを支えるというあらたな意味が付け加わっている。この性別役割分担はネイション形成の基盤となり、ネイションはジェンダー化された形で構築されていった。女性の居場所は家庭だったが、ナショナリズムは男女ともに祖国愛や祖国への誇りを求めたため、女性に社会活動の機会を提供した。女性は家庭をベースに、家庭で行っている世話や献身を祖国のために行うという形で戦時福祉を中心とするナショナルな活動をはじめた。この活動はのちの戦時福祉の手本となったが、こうした社会活動は非常時の例外とみなされたために、恒常的なものにはならなかった。

ドイツ統一戦争期にはナポレオン戦争期と同様な活動が行われ、戦後の恒常的な救貧・福祉活動へと発展して、第一次世界大戦以前の最大の女性協会である「愛国女性協会」が形成された。この協会は既存のジェンダー秩序の維持を重視し、家庭内で良き妻・母として行うケアや配慮をネイションのための福祉活動として行うことを男性の兵役に匹敵する女性のナショナルな義務と捉えた。協会はネイション内に福祉活動という女性の居場所と役割を定着させ、ネイションのジェンダー化をあらたな地平へ導いた。フェミニズムには反対し、政治的には君主制の擁護を至上目的としたため、救貧活動の目的も労働者女性を社会主義勢力から切り離すことにあった。

植民地政策で文明である白人ドイツ人の支配の正当性を示すため、現地では異人種との婚姻が禁止され、ドイツ人女性が植民地へ送られた。この任務を担当した「ドイツ植民地協会女性連盟」は大きな成果をあげ、女性の地位向上をめざす「ドイツ女性団体連合」にも加入した。女性を補助的な役割にとどめたい「ドイツ植民地協会」の男性たちと対立したが、女性独自の「血と文化」の遵守という役割を掲げ、家庭領域を民族主義的に政治化して「新しいドイツ」の創造活動を行った。ネイションのジェンダー化は、人種主義的な色彩を帯びながら強化されていった。

参加をうながすナショナリズムは、女性をネイションのための活動へと招きいれ、家庭の外へと連れだし、女性の社会活動を活発化させた。しかし、その活動を女性の地位向上に結びつけようとする動きも、女性を「女性の領域」の枠内にとどめることには変わりなかった。剣と家族を基盤に強固なネイションを作ろうとするナショナリズムは、ネイションでの両性の領域を固定化する作用を及ぼした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 姫岡とし子 | 4. 巻 52 |
| 2. 論文標題 優しい男性・戦う男性ードイツの近代社会とジェンダー | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 人間文化（神戸学院大学人文学会） | 6. 最初と最後の頁 69 - 83 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 姫岡とし子 | 4. 巻 1149 |
| 2. 論文標題 ジェンダーの視点からみたヨーロッパ近代の時代区分 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 思想 | 6. 最初と最後の頁 73-90 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 姫岡とし子 | 4. 巻 1132 |
| 2. 論文標題 思想の言葉ー感情史とジェンダー | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 思想 | 6. 最初と最後の頁 2 - 4 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 ウーテ・フレーフェルト著、姫岡とし子翻訳・解題 | 4. 巻 no.1125 |
| 2. 論文標題 戦争と感情ー名誉、恥、犠牲への歎び | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 思想 | 6. 最初と最後の頁 134-149 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 レギーナ・ミュールホイザー著、姫岡とし子・小野寺拓也（共訳） | 4. 巻 29巻4号 |
| 2. 論文標題 戦時の性暴力と性的搾取－第二次世界大戦下のドイツ軍の場合 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 立命館・言語文化研究 | 6. 最初と最後の頁 211-220 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 姫岡とし子 |
| 2. 発表標題 桑原ヒサ子『ナチス機関誌「女性展望」を読む』をめぐって |
| 3. 学会等名 ドイツ現代史学会第44回大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 姫岡とし子 |
| 2. 発表標題 優しい男性・戦う男性 - ドイツ近代社会とジェンダー |
| 3. 学会等名 神戸学院大学人文学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 姫岡とし子 |
| 2. 発表標題 私の女性史 |
| 3. 学会等名 東京外国語大学科研「歴史的アヴァンギャルド」研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--------------------------|
| 1. 発表者名 姫岡とし子 |
| 2. 発表標題 歴史教育とジェンダー |
| 3. 学会等名 第67回日本西洋史学会大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 姫岡とし子 |
| 2. 発表標題 グローバル経済史にジェンダー視点を接続する コメント ジェンダー史の立場から |
| 3. 学会等名 政治経済学・経済史学会 春季総合研究会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 姫岡とし子 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 岩波書店 | 5. 総ページ数 290 |
| 3. 書名 木畑・安村編『世界歴史 第16巻 国民国家と帝国』 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 浅田進史・榎木一江・竹田泉・山本千映・仲松優子・坂本優一郎・網中昭世・谷本雅之・長田華子・福島浩治・姫岡とし子 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 日本経済評論社 | 5. 総ページ数 268 |
| 3. 書名 グローバル経済史にジェンダー視点を接続する | |

| | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名 姫岡とし子 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 山川出版社 | 5. 総ページ数 111 |
| 3. 書名 ローザ・ルクセンブルク | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 上野千鶴子・蘭信三・平井和子（編） 山下英愛、木下直子、岡田泰平、茶園敏美、猪股祐介、樋口恵子、姫岡とし子、成田龍一、佐藤文香（共著） | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 岩波書店 | 5. 総ページ数 367 |
| 3. 書名 戦争と性暴力の比較史に向けて | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|